

(レジュメ)「〈近代の超克〉論」

このレジュメは、地区の学習会用に作ったレジュメだが、私にとつては、次の『日本近代の超克と三木哲学との対話』を書くにあつての予備作業であつた。

問題が多岐に及ぶのを防ごうと、事前に各論客の文章を読んでみたのだが、当時は日本浪漫派に多大なるシンパシ―を感じていた。ただ、その熱も直ぐに覚めてしまったが。

○はじめに…〈近代の超克〉という意味

一般的に言われるような「知的生産者に対する時務論」では解ききれない。

・ 内容的↓西田幾太郎を思想的イデオログとする京都学派が、哲学的にこの論争を組織した
・ 心情的↓保田興重郎に代表される日本浪漫派が「敗北へのパトス」を披瀝するなかで、当時の青年・学徒の混沌を底辺からすくい取るという構図

・ 西洋的近代に対抗する、単なる乗り越えではない「超克」が意図されていた↓今のわれわれの問題意識と

も通底する。

・観念のテオリアに陥らず、暗いシニズムに支配されることなく、『近代の超克』（それは科学主義であり、広い意味での生産力思想であると言える）を実現していく途をつかみ取る必要がある。

・保田自身↓世界史上西洋近代に代表されるパラダイムが、悪しき合理主義を生み出し、人間の創造性を阻害している現実を変革しようという意図

↓竹内好の言うような、時代情勢に翻弄されるイデオロギーを流布したということは言えても、一樣に戦後の論壇において「侵略賛美」とレッテルを貼ったような、戦前の時務論への加担という主張には見るべきものがない。

・日本の現状に対しあくまでも文学的なスタンスで近代の超克を成さんとした。（あくまでロジックとして）

例…「もののあはれ」・「イロニイとしての日本」

・ドイツ・ロマン主義に憧れ、その終着に近代の閉塞を見た保田（ゲーテの『若きウェルテルの悩み』をめぐる考察）

・“万葉の昔へ還れ！”↓言語化（ロゴス）できない情念（パトス）を、自然（じねん）としての流転のなかで促えようとする苦闘

・（因みに、三木清はロゴスとパトスの総合として“構想力の哲学”“ポイエシスを立ちあげようとするも挫折↓侵略の御用哲学者へ”）

転向文学の分岐と日本浪漫派

- ・ 文学界グループ 振興芸術派と転向派の寄合所帯。思想的には雑多
- ・ 京都学派 哲学的に「近代の超克」を論じ、心情に理論的裏打を与える
- ・ 日本浪漫派 「大君の辺にこそ死なめ」現状に対する絶望を介したシニシズム 国粹的な美意識
- ◎ナルプ（日本プロレタリア作家同盟）↓『人民文庫』と『日本浪漫派』に分裂
- ・ この「異母兄弟」は日本プロレタリア文学運動の挫折の落とし子であり、決してイズムとしてのロマン主義を自覚していたのではない。（「ふと気づいた何かしら共通の感覚」）
- ↓ 近代の啓蒙主義的合理主義に対する揺り戻しが指向されていた 近代的ゲゼルシャフトvsゲマインシャフト。個人主義vs民族的大我…etc。

日本プロレタリア文学運動の挫折と転向

- ・ ナルプの政治主義的偏向Ⅱ政治団体の組織と同一の方法が作家団体に対しても取られた
- ◎（マルクス主義）イストが思想的に転向するⅡ世界観・価値観の総体が根底から転換
- 転向ないし組織活動からの離脱が思想そのものの次元で自己合理化される時、決定的な価値転換が帰結する
- ・ マルクス主義者は（自らの）イズムを、諸他のイデオロギーに対して「絶対化」する。
（ヨーロッパ近代の諸思想の最高峰であると了解している由に）
- ・ だからマルクス主義から思想的に転向するということは、既成のヨーロッパ諸思想全般を貶価することと同

じ。

↓ 東洋的な「或るもの」へと向かうことになる。(それは何か?)

文明開化の論理の終焉と新生

・「思想としての満州国」

『満州国』はフランス共和国、ソヴィエト連邦以降初めての、別個に新しい果敢な文明理想と、その世界観の表現である。』

・「五族協和」「王道楽土」の実現である満州国の理念―西欧近代の「一挙的」超克

しかし現実には、中国の植民地化でしかなかった。

・一方での「マルクス主義からの転向」―屈折と、「満州国」理念へのアンガージュマンの挫折によって、彼らにデスペレートな心情が芽生える。

・「没落への情熱」(『イデー』)―「日本のイロニー」(『現実認識』)デスペレートな「故郷」奪還↓神人同床の古代

・しかし浪漫的日本回帰をテオリ―にまで形成しえない

・「次の曙への夜の橋」を渡るために、遮二無二イロニーとしての日本を承諾必謹走り抜けるほかない―デスペレートな居直り”

日本文芸の古典と近代性の涯

- ・この座談会に参加した文学・評論家たちに共通していた意識
- ・国粹主義的な夜郎自大ではなく、欧化絶対主義的な文明開化に対する醒めた相對主義
- 「近代が悪いから何か他に持ってこようというやうなものではない」(小林)
- (古い理論を新しい理論に置き換える) というような実体主義的なものではなく、不変なもの・歴史性を超えるものについても、それは絶対的な実体ではなく、むしろ「永遠の今」とでもいうべき或るものへの覚醒
- 近代性の涯と信ずる処まで歩いていって拓けた古典に通ずる境地
- それは日本的な真(認識)・善(倫理)・美(審美)への憧憬

Keyword

ロマン主義 (Romanticism)・・・十八世紀末から十九世紀初頭にかけてフランスにおこり、ヨーロッパに展開された文芸思潮。古典主義・擬古主義に反対して、伝統にとらわれず、自由奔放な内面感情の優越性を主張し、無限なものへのあこがれを表現しようとする。

因みにゲーテの『ウェルテル』では、ゲーテの主人公・ウェルテルに対する距離の取り方が「作者の自虐の形式」である「虐待」であると、保田は論じていて、ヨーロッパのロマン主義とは一線を画す志向が垣間見られて興味深い。

イロニー (irony) …古代ギリシャのソクラテスの用いた問答法。対象について誤ったことをいい、これを承認するようにみせかけながら、これと反対の真実を明らかにする論法のこと。これが転じて、皮肉やあてこすり、反語などの意味にも用いられる。

ここで日本浪漫派によって宣揚されている「日本のイロニー」という表現は、極めて文学的表現ながら、近代主義的な社会に対するアンチテーゼが意図されている。

デスペレート (Desperate) …絶望する。自暴自棄的な様のこと。

万葉集：「万（よろず）の言葉（ことのは）の集」という意。現存する日本最古の歌集。編者・成立年代は不詳だが、長年月にわたり何人かの編者の手により成ったもので、最後に大伴家持によって整理し追加され、奈良時代の末か平安時代の初めごろには現存の形態ができていたと推定される。全二十巻。四千五百首ほどの歌を含み、歌体も長歌・短歌・旋頭歌等数種類におよび、作家は天皇・貴族から庶民に至るまであらゆる階層を含む。時代的には記載に従えば仁徳天皇のころから、七五九年（天平宝字三）に至る四百五十年にわたるが、舒明天皇前後から一世紀間の歌が大半を占める。時期によって歌風の変化はあるが、その多くは素朴な感動と健康な格調にあふれている。すべては漢字だけで書かれ、いわゆる「万葉がな」と呼ばれる、漢字の特殊な用法が多いのが用字法上の特色。

保田がその理想郷としている「万葉の昔」というのは、神人同床の古代という位の意味で、価値観の混在した差別無き理想社会が想定されている。